

東京都交響楽団の将来像に関する有識者懇談会

第3回議事録

平成30年10月26日（金）14時00分～

東京文化会館 中会議室2

【吉本副座長】 それでは、定時になりましたので始めたいと思います。

委員の皆様におかれましては、お忙しい中ご出席をいただき、まことにありがとうございます。

きょうは、堤座長がご欠席ということでございますので、私のほうで進行をさせていただきます。

まずは、事務局から定足数及び会議の公開に関する確認をお願いいたします。

【赤羽事務局長】 定足数の確認でございます。東京都交響楽団将来像に関する有識者懇談会設置要綱第4条第2項におきまして、懇談会の会議は委員の過半数の出席を要しております。本懇談会の委員数は10名、現在7名のご出席をいただいておりますので、懇談会は成立していることをご報告させていただきます。

なお、堤座長と片山委員、澤委員は、所用によりご欠席とのご連絡をいただいております。

本日は、大野音楽監督がリハーサルを行っておりますので、その状況にもよりますが、途中から参加させていただく予定にしております。

また、本懇談会は、設置要綱第6条によりまして、公開で行うものとされておりまして、資料及び議事概要につきましても原則公開となっております。懇談会の決定により、非公開とすることができます。本日は、石田委員の資料につきましては、1点目の資料「指揮者ダニエーレ・ルスティオーニ オペラ歌手のためのマスタークラス」を公開、それ以外の資料は、委員の皆様及び事務局限りの資料ということでお申し出がありましたので、石田委員の資料は一部非公開、その他は公開ということでよろしいでしょうか。

（異議なし）

【赤羽事務局長】 ありがとうございます。それでは、本日の会議は公開とさせていただきます。

傍聴の皆様におかれましては、お配りいたしました懇談会の傍聴に当たっての注意事項のとおり、録音・録画、私語等をお控えください。懇談会の円滑な進行にご協力をお願いいたします。

以上でございます。

【吉本副座長】 ありがとうございます。

それでは、議事に入る前に、配付資料について事務局からご確認をお願いします。

【赤羽事務局長】 それでは、お手元にお配りしている資料でございます。

石田委員からご提供の資料、ただいま申し上げましたルスティオーニの資料、また、このカラー刷りのもので「韓国オペラ上演の現状とオペラ歌手」、それが3枚つづりでございます。そのほか、新聞の記事がございます。

そのほか、2点目といたしまして、当楽団の2019年度楽季ラインナップのプレスリリースとリーフレット。

また、「TOKYO MET SaLaD MUSIC FESTIVAL 2018 [サラダ音楽祭]」の実施報告及びリーフレット。

以上を配付しておりますので、お手元の資料をご確認いただきまして、不足等がございましたら、どうぞお申し出ください。

また、基礎資料集のファイルの中に、第2回東京都交響楽団の将来像に関する懇談会議事録を追加いたしました。

では、少々お時間をいただきまして、当楽団の2019年度楽季ラインナップにつきましては、芸術主幹の国塩から、「TOKYO MET SaLaD MUSIC FESTIVAL 2018 [サラダ音楽祭]」につきましては、経営企画部ゼネラル・マネジャーの小川からご説明をさせていただきます。

【国塩芸術主幹】 国塩でございます。座ったままで失礼します。

お手元のカラー刷りの2019年度楽季プログラムという速報版のプログラムをごらんください。そして、それにつけております報道資料、A4の紙1枚、こちらに概要が書いてあります。

これを、カラー刷りのものを左側に開いていただきますと、1年間の定期演奏会の一覧表になっております。

音楽監督の大野和士と、毎年身を相談していくわけですが、大野音楽監督自身が指揮をする主なコンサートについては、さらにこの反対側に大野監督自身のメッセージ

が書いてありますので、後ほどこれをお読みいただければ詳細がおわかりいただけると思います。

大野和士、それから首席客演指揮者のアラン・ギルバート、終身名誉指揮者の小泉和裕、そして、桂冠指揮者のエリアフ・インバル、この4名のすばらしい指揮者の演奏会はもとより、ここ数年、都響に客演したゲストコンダクターの中から、楽員、聴衆に評判の高かった方、また現代の最先端を行っている指揮者たちを再び招いて、演奏会を持つことができます。

例えば、定期演奏会Aシリーズのアンドリュー・リットン、それから、マルク・ミンコフスキ、そして、2月に参りますフランソワ＝グザヴィエ・ロト、そして、ペンデレツキ、もう85歳ぐらいだと思いますが、2008年に都響で共演して以来になります。自作を指揮されます。マーティン・ブラビンズといったあたりは、定期的に来ていた指揮者であります。

それから、今回、都響と初めての共演となるのは、C定期で6月に出るアレホ・ペレス、それから、フィリップ・フォン・シュタイネッカー、そして、プロムナードコンサートに初めて登場になりますが、川瀬賢太郎、こういうフレッシュな顔ぶれも取りそろえて、バラエティーに富んだプログラムにしております。

全体的には、マーラー、ブルックナー、ショスタコーヴィチという、いわゆる大曲というものが中心に据えられておりますが、これは都響の元々の中心レパートリーにあると同時に、お客様が都響ではこういうプログラムを聴きたいという期待にもお答えしていこうというものであり、大野監督自身の、そのマーラーを軸とした前後の音楽世界への展開というものにも沿ったものであります。その中に先ほどのペンデレツキであるとか、それから1月のB定期、マクミランの新作の日本初演などといった新しい音楽の紹介も加えてっております。

このように幅広い層に聴いていただける、しかも都響らしい内容で聞いていただけるものをつくったつもりでおりますので、どうぞご注目ください。駆け足で失礼いたしました。

私からの説明は以上です。

【吉本副座長】 どうもありがとうございました。

今の国塩芸術主幹からのご説明について、何かご質問等あれば、ここでお受けしたいと思います。ご意見がある場合は後半に時間はとっておりますので、とりあえず確認したいことなどございましたら、いかがでしょうか。

大丈夫そうですか。

【近藤理事長】 ちょっと補足をさせていただきます。

7月24と25日は、アラン・ギルバートで、モーツァルトとブルックナーをやりますが、2019年はオーストリアとの外交関係樹立150周年となります。ちょうど2人の作曲家の出身がオーストリアなので、この公演を日頃の150周年の記念というふうにしたいと思っています。大使をお呼びしたりそういう記念のものにしたいと思います。

【吉本副座長】 ありがとうございます。

それでは、事務局に次の説明をお願いします。

【小川GM】 それでは、続きまして、9月17日に開催いたしましたTOKYO MET SaLaD MUSIC FESTIVAL[サラダ音楽祭]につきまして、実施結果をご報告させていただきます。お手元に実施報告の資料、A4の横判のものをお配りしてございます。あわせて、音楽祭のリーフレットを参考に配付させていただいておりますので、あわせてごらんいただければと思います。

実施報告でございますが、前回の懇談会でもご案内いたしました。この音楽祭は、誰もが「歌い・聴き・踊り」参加して楽しめることをコンセプトに、「Sing and Listen and Dance」の頭文字から、通称、サラダ音楽祭と名づけております。

1枚おめくりください。

コンサートは2公演実施しまして、まず、「OK！オーケストラ」の実施状況です。赤ちゃんOK！歌ってOK！踊ってOK！ということで、都響の演奏にコンドルズのダンスや児童合唱とコラボレーションしたコンサートです。

2歳以下のお子さんは膝上で鑑賞できるということで、当日は多くの赤ちゃん連れにご来場をいただきまして、入場者1,943名のうち、263名は膝上の赤ちゃんたちという状況でございました。

演奏中はあちこちから泣き声、笑い声が客席で響いておりまして、お父さん、お母さんもリラックスして、家族そろって楽しんでいただきました。

指揮者体験のコーナーやみんなで合唱するコーナーもございまして、来場者からは、また来たいといった声も多くいただいたところでございます。

次のページをごらんください。メイン・コンサートの「プルミエ・ガラ」です。

コンサートの幕開けは、小池知事の指揮による1964年のオリンピックマーチでござ

いました。知事も非常に楽しそうに指揮をされてございました。

第二部は「カルミナ・ブラーナ」で歌とダンスのコラボレーション、圧巻のフィナーレとなっております。

次のページをごらんください。街中でのミニコンサートです。

池袋の駅ビルや商業施設、西口公園などで13公演実施いたしまして、まち全体を盛り上げました。買い物客など、全体で2,000名を超える多くの方々に演奏や合唱などを聴いていただいたところがございます。

次のページでございます。お客様みずからが参加できるワークショップでございます。

写真にございますとおり、本物のヴァイオリンやチェロを楽員の指導で実際に弾く楽器体験や、コンドルズさんのダンスのワークショップ、親子で楽器づくりといったもののほか、歌のワークショップですとか、音楽とAIのワークショップといったものも用意して、五つのワークショップ、小さい子供も楽しめる内容で実施したところがございます。会場には順番待ちの長い列ができて、苦情を受けるぐらいに大盛況でございました。

今年は1日の開催でございましたけれども、来年は日数を拡大して実施したいと考えております。

音楽祭の報告は以上でございます。

【吉本副座長】 どうもありがとうございました。

こちらについても、もしご質問等があればと思いますがいかがでしょうか。

では、後藤さん、お願いします。

【後藤委員】 一つだけ、すみません、前回欠席したのでお伺いしたかったんです。

これは池袋というのを選ばれた理由は何でしょう。東京芸術劇場さんとのコラボとかがあると思うんですけど。私も池袋はよく使う駅なので興味があります。

【小川GM】 こちら主催が東京都と都響で、共催が東京芸術劇場と豊島区というところで芸術劇場をメイン会場として、その周辺地域でもミニコンサートを開催するといった形で実施させていただきました。

【吉本副座長】 ありがとうございます。

サラダ音楽祭については、先日開かれた東京芸術文化評議会で大野音楽監督ご自身からいろいろご説明いただきました。何か若い職員の方々のアイデアだと、そのとき伺ったんですけれど、他にもいろんなアウトリーチというか、コミュニティプログラムをやられていると思いますけど、街なかでこういうふうにやってみるというのは、今回これが初めて

なんですか。

【赤羽事務局長】 通常、演奏会を行うときは、どんなプログラムにするかなど演奏統括部で企画するのですが、サラダ音楽祭は、本当に組織横串で楽団の事務局の若手職員がPT、プロジェクトチームをつくりまして、いろいろ企画を練っていたといったところですよ。

街なかのコンサートなどは、エキュート等の商業施設などでクリスマスコンサートとか、いろいろご依頼があったものなどはこれまでもやっておりますので、全く初めてということではないです。

【吉本副座長】 結構、最初から最後まで泣かれていた赤ちゃんがいらっしゃったというのを聞きましたけど、もうそれも全部オーケーというようなことだったということですね。

【赤羽事務局長】 そうですね。

【吉本副座長】 ありがとうございます。

それでは、議事に入っていきたいと思います。

お手元の議事次第に従いまして、第3回目のテーマであります「海外事情も見据えたオーケストラの今後の展望とイメージ戦略」ということで、きょうは、石田委員と後藤委員からプレゼンテーションがございます。

お二人にプレゼンテーションを続けて行っていただいて、その後、質問、意見交換等に入りたいと思いますので、よろしくをお願いします。

じゃあ、石田さんからお願いできますでしょうか。

【石田委員】 本日は、このような機会を与えていただきまして、ありがとうございます。よろしくをお願いします。

きょうのタイトルは、いただいたお題を入れつつ、私なりに設定しました。「海外事情を見据えた日本のオーケストラの発信を考えるために」というタイトルで、オペラとオーケストラの世界地図が変わるというお話をしたいと思います。

私のフィールドは完全にオペラに偏っているといっても良いので、内容もどうしてもそちらに寄せた話になります。この写真もイギリスのグランドボーン音楽祭ですが、きょうはヨーロッパの話は余りしないと思います。

お手元の資料をごらんください。一つは、都響さんにご協力いただきまして、昭和音楽大学でルスティオーニのマスタークラスを実施しましたときのプログラムのコピーでござ

います。この中に「オペラ劇場の現在」という題で、私が寄稿した文があります。これは本日のお話に近い内容です。

人材は国境を越えるというのが一つのテーマでございます。この業界で有名な皆様方と違いまして、私は何をしている人間なのか、余りご存じないと思いますので、自己紹介も兼ねまして、人材の状況や育成についてお話ししたいと思います。

まず、アーティストです。これは私共が実施しましたマスタークラスの写真です。ご存じファビオ・ルイーダさんのマスタークラスです。本学の学生がレッスンを受けていますけれども、そのときの彼の言葉をご紹介します。「ギリギリまで自分の演奏を追い込んで。その先にあなたの表現が見えてくるでしょう」。一流のアーティストから、実際にレッスンを受けるということが、どれだけ学生に役に立つのかということを目の当たりにしました。

実は専門人材と言いましても、アーティストだけを育てているわけではございません。これは、ミラノ・スカラ座の舞台上です。私どもには海外研修という授業がございまして、スカラ座に学生を連れていきます。この学生たちは、アーティストの卵ではございませんで、舞台スタッフ、それからアートマネジメント人材の卵たちです。

右上に3人イタリア人がいらっしゃるのを、ご覧になれますか。ミラノ・スカラ座の方達なんです。彼らが舞台に上げてくれて、15分前までここでアンナ・ネトレプコが死んでいたという、その舞台の上で授業を受けたときの様子です。こういう実際の創造現場との関係を大切にしながら、仕事をしております。

それから、昨年、オーケストラ関係ではこのような仕事もいたしました。読売日本交響楽団が出しました『オーケストラ解体新書』という書籍の中で、山田和樹さん、西村朗さんと私の鼎談で、オーケストラの未来を考えるとといったようなお話をさせていただいております。

ただ、オーケストラのフィールドでの仕事は余りなくて、基本的にオペラ関係の仕事が多いです。『日本のオペラ年鑑』は20年以上継続して発刊しています。1年間に日本で行われたオペラ公演を全て収録するというアニュアルレポートを出しております。

今は2017年をつくっています。2016年の目次はこのとおりですけれども、2017年には座談会をいたしました。大野監督、これは新国立劇場の新オペラ監督としての大野さん、音楽評論家の堀内修さんと、オペラ年鑑の編纂委員長としての私という座談会で、もう少ししましたら、それが掲載された最新号がお手元に届けられると思います。

本題に入ります。舞台スタッフコースの学生たちが、舞台監督を務めている写真です。会場のモニターと時計を見ながら、進行管理をしている舞台監督の卓の様子です。

このような学生を育てる中で、それから先ほどの『日本のオペラ年鑑』を発行する中で考えていることをお話ししたいと思います。

オーケストラとオペラの関係ということなんですけれども、オペラ公演でオーケストラというのは非常に重要な役割を担っています。もちろん、ピットでの演奏とか、バンド、舞台の上あるいは舞台袖での演奏といった機会も多くございます。オペラ公演が増えればオケの仕事は増えます。オペラ公演が増えれば増えるほどオーケストラも豊かになる、ぜひオペラを応援していただきたいということがきょうのお願いです。それ以外にももちろんオーケストラの定期公演でコンサート形式、演奏会形式などの作品を取り上げられるということも多いと思います。

実際に、東京都交響楽団は、最近、私が伺った中では、例えばアンドレア・バッティストーニさんとの《イル・トロヴァトーレ》、それからルスティオーニさんとは《トスカ》を上演されたりしています。

「例」と書いてありますが、東京フィルハーモニー交響楽団さんはオーケストラ・ピットにかなり経験を持つオーケストラといってもいいと思うんですけれども、2016年の1年間では41回オーケストラ・ピットに入って、公演されているという実績がございます。

オーケストラ公演でのオペラということになりますと、先ほど申しましたコンサート形式、演奏会形式ですけれども、プロのオーケストラによるものは、数えますと20回超えるぐらいかと思います。それほど多くないです。ただ、とても重要で、印象的な演奏会も多いんです。

2016年の例です。チョン・ミョンフンと東京フィルハーモニー交響楽団の《蝶々夫人》はすばらしい演奏でした。それから、昨年ほどなたに聞いても、これを挙げられると思います。シルヴァン・カンブルランと読売日本交響楽団の《アッシジの聖フランチェスコ》です。この他、ピエタリ・インキネンと日本フィルハーモニー交響楽団の《ラインの黄金》も良い演奏会だったと思います。

そういうオーケストラとオペラの関係というのがあるところに、もう一つ、オーケストラのアマチュアのオーケストラがオペラに取り組むなんていうことが出てきているんですね。藤沢市民オペラというのは日本最古の市民オペラです。園田隆一郎さんが藤沢市民オ

ペラの芸術監督に就任されたときは、まだ30代でした。彼はアルベルト・ゼッダさんというロッシーニの権威の薫陶を受けまして、ロッシーニに関するエキスパートとして活躍をするようになっております。その彼が市民オペラの芸術監督に就いたという関係もありまして、ロッシーニの《セミラーミデ》を全曲4時間、アマチュアオーケストラで上演しました。これは大きなトピックだったと思います。

それから、愛知の祝祭管弦楽団もアマチュア・オーケストラなんですよ、池田さん。

【池田委員】 はい、アマチュアです。

【石田委員】 彼らが「ニーベルングの指環」に取り組んでいます。

経済的な話も紹介したほうがいいのかと思ひまして、事例を持ってきました。

オーケストラもオペラもとにかく金食い虫、お金がかかるということは、皆さんご承知、毎日毎日それで苦労されていることだと思うんです。とは言いながら、やはり、こういったレジリエンスというんですか、芸術団体の力というものを、もっと蓄えるべきだということが、声を大にして言われるようになってきました。そのときに収入源をどのように確保していくのかということはお話ししなければいけないと思います。

ここに持ってきた例が非常に典型的な、でも、ちょっとオーケストラにはなかなか耳が痛いだろうというような話です。ボックスオフィスというのはチケット収入のことですね、ファンレイジング、寄附金、それからその他の収入、その辺がどうなっていくのかというところが、今後はとても芸術関係にとって大事な話になってくると思います。

それから補助金です。ヨーロッパの話はしないといったんですけど、やっぱりします。

ロイヤルオペラハウスの収入構造です。今はこうなっています。

彼らの工夫のポイントは、その他の収入のところ、ここに何が含まれているかというのは、きょうはお話しませんが、ボックスオフィス、それから、ファンレイジング、補助金がとにかく頭打ちという状況です。補助金も今は19%とありますけれども、15年以上前は32%といったような比率でした。それがどんどん減少している中で、四つ目のその他の収入をふやすという努力をしています。

一方で、ザルツブルク音楽祭ですね、これもちょっとお見せしますが、彼らも結構な補助金を受けているんです。21%と書いてあって、あと、民間資金なんて書いてありますけれども、その民間資金の中に、観光基金なんていうのも入ってまして、ザルツブルク音楽祭は補助金と、それからチケット収入、それから、友の会の収入が多いことに特徴を持っている音楽祭の例です。

こうした工夫するというのが、世界中の芸術団体にとっての大きな大きな課題になっているわけです。そうした中で、彼ら、我々もそうなんですけれども、今後、そのヒントをきょうはお話をします。

オペラの世界の話です。オペラの世界で自分たちの体力をどうやって蓄えて、このまま確保していくかというようなことです。私が2014年のオペラヨーロッパという国際会議に呼ばれて、お話をしろと言われたのが、日本のオペラの状況についてです。ヴェネツィアのフェニーチェ歌劇場が会場でした。「Opera beyond Europe」というタイトルのカンファレンスに参加して、基調講演をしました。その時の話も含めたいと思います。きょうはアジアです。

アジアには、今四つの丸をつけてありますけど、四つのオペラの中心があると思っています。

右が、日本もちょっと入っていますけれども、今や中心は中国と韓国に移動しつつあります。それから、その南のフィリピンです。フィリピンというのは英語圏ということもあって、合唱団、歌手などの供給源になっています。ベトナムにもオペラハウスがあります。

それから左上、カザフスタンにすばらしいオペラハウスができています。それから、一番左は、UAEのドバイですとか、オマーンですとか、そのあたりはすごいオペラハウスができています。これはオマーンのオペラハウスです。王様がつくりました。

スライドにゼネラルディレクターの名前が書いてあります。今はイタリア人が務めています。前任者はドイツ人で女性の総裁でした。彼らは雇われてきて何をしているかというところ、まだ制作の実績のない、こういったオペラハウスに、自分の人脈でヨーロッパのオペラハウスのプロダクション、あるいはオーケストラの演奏会を持ってきているんです。その公演がきら星のごとく並んでいるというのが、ロイヤルオペラハウス・マスカットの状況です。

UAE、ドバイオペラです。これは右の上に象徴的な写真があります。インテンダントはイギリス人なんです。オイルマネーで建てた後方に移っているオペラハウスで、いろいろな舞台を実際に上演しています。

そういった話をオペラ・ヨーロッパの会議で見聞きした私は、「よし、今後はアジアだ」と思いまして、科研費をいただきまして、「アジアにおけるオペラを受容構造と創造活動に関する研究」というテーマで、3年間にわたって研究を行っています。今年が最終年度です。その中でいろんな知見がありましたので、ちょっとお見せしたいと思います。

韓国は、今はオペラの上演が盛んになっております。中心になっているのが、世宗文化会館、芸術の殿堂、それからテグ・オペラハウスです。テグというのは、とても元気な街なんです。サムスの発祥の地なんですね。このオペラハウスは、サムスが建てて、今は公共のホールになっている、民設公営のオペラハウスです。そこで盛んにオペラを上演しております。

写真を幾つか持ってきましたので、ちょっとお見せします。これは、韓国オペラ団が芸術の殿堂で上演した《トスカ》ですね。欧米の歌手を招聘して上演しています。

それから、世宗文化会館というところでは、ソウル市オペラ団が、すてきな《愛の妙薬》の舞台を上演しています。

韓国の歌手は非常に強い声を持っているとされています。皆様のお手元にあるのは、藤原歌劇団の「ランメルモールのルチア」のプログラムに私が寄稿した記事です。「韓国のオペラ上演の現状とオペラ歌手～アジアから世界へ～」として、韓国のオペラ歌手がどれほど世界で歌っているかということをもとめているレポートです。強い声ということだけじゃなくて、彼らのプレゼンテーションのすばらしさも、世界を席卷している要因だろうという状況をまとめてございますので、これもお時間のあるときにぜひお読みください。

グァンチョル・ヨン、サムエル・ヨンですとか、もちろん、ヴィットリア・イエオとかヨンフン・リー等の歌手の名前もございます。彼らのキャリアを見ますと、韓国で勉強した後、欧米に行き、大スターとして世界中で歌っている状況です。

テグのオペラハウスは、ボンの歌劇場が《フィデリオ》をやっていました。なかなかまとまったよい舞台でした。

台湾には伊東豊雄さんの設計でオペラハウスが新たに建っています。今は「ニーベルングの指環」を上演しています。

中国の話に行きたいと思います。中国、これは上海なんですけれども、まあ、この辺はもう先生方もよくご存じだと。

これは中国の音楽大学の学長が集まった会議での1枚です。何かというと、このとき、実は私どもも昭和音楽大学が上海音楽学院と共同制作で（これは《フィガロの結婚》と読むんです）、上海で上演しました。

このときの上演には上海音楽大学の学生も参加して、それで、もちろん我々の歌手も参加しての舞台でした。

舞台は私どもの大学が持っていっています。上海の歌手と私どもの歌手と混合で上演し

ました。これは去年の《ドン・ジョヴァンニ》です。この真ん中にある歌手は中国人の学生です。

中国の状況をちょっとお話します。オペラハウスが中国全土にぼんぼんキノコのように生えているという状況です。天津に、これはハルビンです。こういうのが、どんどんどんどん建っています。

先ほど、地図上の四つの地域に円を書きましたけれども、多分、これから一番大きな円になっていくのが、中国だと思います。中国が大きなマーケットになっていく。そのマーケットになっていく中国というのをにらんでいるのが、先ほども言いましたけれども、ヨーロッパのオペラハウス、それから、もちろんアメリカのオペラハウス、オーケストラ、ヨーロッパのオーケストラもそれをにらんでいます。

象徴的な会議が今度開かれますので、それをご紹介しますと思います。

国際アーツ・アドミニストレーション上海フォーラムが、今度11月に開かれます。そこで、基調講演をするのがこの二人。ミラノ・スカラ座のペレイラ、パリ・オペラ座のステファン・リスナーの二人の総裁です。何とこれに私も呼ばれました。私がしゃべって、ペレイラがしゃべって、リスナーがしゃべってという順番になります。この国際会議で、日本のオペラの状況に加えて、中国と日本がこれからどうやって関係をつくっていくのかというような内容で1時間ほどお話をすることになりました。

存分に日本をアピールしてきたいと思います。もし、そこで都響さんの名前を出すようにということであれば、話題をいただければと思います。

こうやって欧米のオペラハウスも、それから、オーケストラも、中国に加えて先ほどのオマーンの劇場ですとか、それからドバイの劇場ですとか、そういったところを自分たちの公演会場、公演の場所として捉えて、どんどん、どんどんアピールをしています。

彼らがなぜ上海に行くのでしょうか。上海に、2023年と言っていたかな、オペラハウスがもう一つ建設される予定なのです。既に上海歌劇院というオペラハウスがあって、東方音楽センターという大きなホールもあるんですが、それに加えて、上海万博の跡地に大きな複合的な文化パークをつくる、その中心にオペラハウスを建てるという計画があるんです。それを見据えてのフォーラムです。その建設準備を進めている人たちが上海に彼らを招き、私にも声をかけてきたわけです。

こういうことがこれから必要なんだと思います。もちろん、ブランドをつくっていくということもあるんですが、自分たちの向かう場所が、次にどこにあるのかというアンテナ

を張って、場所をつくっていくということをみんな考えなければいけないんだろうなと思います。やはり日本からの発信が必要だと、まとめつつ、一番最後の資料をご覧ください。

これは何かというと、日本のオペラを海外にどうやって発信したらいいんだろうということを、池田委員の後輩の岩崎記者が課題としてお持ちだったところ、本学で実施しております日本語でつくるオペラのプロジェクトを紹介していただきました。サントリーホール、新国立劇場の大野和士さんの活動とともに紹介していただいていますので、これもよろしければご一読ください。

最後は、やはり世界に日本の舞台芸術の発信をということで、オーケストラには重要な大きな役割を担っていただきたいという私の願いも込めまして、プレゼンテーションを終わらせていただきます。

ご清聴ありがとうございました。

【吉本副座長】 どうもありがとうございました。

それでは、続いて、後藤さんのほうからお願いできますでしょうか。

【後藤委員】 ありがとうございました。

私のほうは、とてもアナログに純粹にお話だけになります。

どんなお話をしようかといういろいろ考えたんですが、一応、ロンドン在住なので、ロンドンのオーケストラという身近なところからお話しするのがやはり一番いいのかなと思って、主にロンドン交響楽団（LSO）についてお話しします。この間、9月に来日したばかりで、皆さんお聞きになった方もいらっしゃると思いますけれども、サイモン・ラトルを迎えて、いろんな新しい試みもしてます。ロンドンには、主に四つのオーケストラがあるという言い方をしていると思うんですけども、ロンドン交響楽団とフィルハーモニア管弦楽団とロンドン・フィルハーモニー管弦楽団（LPO）と、それから、BBC交響楽団の4つですね。ロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団もあるんですが、大体、ロンドンの人たちはこの四つをメインのオケと見なしています。BBCは放送オケなので、またちょっと課題も違うし、ミッションも違うと思うんですけども。だから、やっぱりLSOとフィルハーモニアとLPOの三つが比べられることが多いです。ちょうど、この間9月にシーズンそれぞれのシーズン開幕のコンサートを聞きにいったんですけども、やっぱり、いろんな意味でLSOは、もちろんラトル効果もあるんですけども、元気だなという感じがしました。

LSOのことを考えるにあたって、どうしても日本で聞くときはコンサートの面しか見

ないんですけども、でもLSOというのは、実はオーケストラのコンサート以外にものすごくさまざまな活動をしてまして、もう、それをご紹介するだけでもうすぐに時間が終わってしまうんじゃないかと思うほどです。LSOはロンドンのバービカンホールというホールのレジデント・オーケストラではありますが、バービカンセンター自体は、別の組織でほかに貸し館もしているので、そこで全てリハーサルができるわけではないんですね、LSOでも。本番当日のゲネプロとか、できるときは3日間リハーサルとかできますけど、できないときは、以前はほかの会場を借りていたんですね。

それで、もう大分前になるんですが、2003年にそのバービカンセンターから歩いて5分ぐらいのところにある使われていない教会を買い取り、そこをLSOのいろんな意味でのエデュケーションも含めて、自分たちのハブにしようということで、その使われていなかった教会を改築して、LSOセント・ルークスという「ミュージック・エデュケーションセンター」すなわちバービカンのエリアのコミュニティに根差した一つのハブをつくりました。

ここを拠点に、今はLSOのさまざまな教育活動、LSOでは教育活動全体をLSOディスカバリーと言っているんですけども、いわゆる学校コンサートから、大人向けのレクチャーから、例えば演奏会の午前中にLSOディスカバリーデーといって、夜のコンサートにやる曲を1日いろんなスピーカーを呼んでレクチャーをするというようなこともやっていますし、それから一方では、本当にLSOはかなり活発なエデュケーション・システムを持ってますので、3歳児のためのグループ活動やコミュニティクワイアといって合唱団をつくらったりとか、本当にそこを拠点に活動しています。これがLSOセント・ルークスとLSOディスカバリーというLSOの教育活動のハブもあります。

この間、ラトル就任2年目の記者会見があったんですけども、さらに、そのときに発表されたのは、今度、来年の秋からなんですけども、LSOイースト・ロンドン・アカデミーという、LSOの独自の音楽アカデミーをスタートすることが発表されました。11歳から18歳までで、特にこのイーストロンドンといって、どうしてもロンドンには貧富の差が大きいので、東ロンドンのほうの貧しい家庭の子供で従来の私立の音楽学校に通えないけれど音楽家を目指したい中高生ぐらいの子たちの教育を全額無料で行うそうです。そういうことに着手するということからも、ますますLSOが地域全体、本当にコミュニティに根差して、子供から大人まで音楽を普及していこうという、意欲が見られると思うんですね。

本当にLSOというのは、いろんなところと提携していて、ちょうどバービカンの隣にギルドホールという音楽大学があるんですけども、そこもとても密ないろんなプロジェクトをもう一緒にしてますし、例えば、LSOのコンサートの前のプレコンサートにギルドホールの学生が舞台上で演奏したりとか、そうすると親御さんも来たりとか、それも、ちゃんと大ホールでやったりとかするんですけども、学生たちもそのままコンサートを聴いたりとか、そういうような提携もしてますし、それから学生、これはギルドホールだけじゃなくて、ほかのロンドンの四つぐらいの音大から弦楽器の学生たちを2年間かな、たしか「String Experience Scheme」というのがありまして、これは日本でもあるかもしれないですけども、学生と一緒にLSOと演奏をして、本番にも乗れて、プロと一緒に弾いて指導も受けてオーケストラの経験を得るという、そういうスキームもあります。

それから、LSOの指揮者コンクールですね。ちょうどこの間、日本でも指揮者コンクールがあったばかりですけども、LSOがやっているこの「Donatella Flick Conducting Competition」、このドナテラ・フリックさんというのは、お金を出している方です。もう20年ぐらいやっていると思うんですけども、2年に一回行われて、多分、EU内のヨーロッパの学生だけが対象だと思います。おもしろいのは、これに優勝した人がLSOのアシスタント指揮者になって、それで2年間とか、ずっと首席指揮者のアシスタントを務めて、経験を積み、それから、さっき言ったようなスクールコンサートとか、いろんなエデュケーションプロジェクトも、その人が結構中心になってやっていくという、うまくいろんな活動がつながってくると思うんですよ。

それから、最近の新しいイニシアティブとしては、これは、私まだちょっと行けてないんですけども、6時半からの1時間コンサート、「Half Six Fix」というシリーズがあります。イギリスのコンサートは7時半が多いんですけども、7時半とか8時だけのコンサートじゃないフォーマットで、もうちょっと若い人とか、仕事帰りの人に興味を持ってもらおうということで、6時半からのコンサートをたしか年に6回ぐらいやっています。それは指揮者がラトルだったり、フランソワ＝グザヴィエ・ロトだったり、ジャンドレア・ノセダだったりするんですけども、舞台上で自分で曲について紹介するコンサートで、休憩なしで1時間ぐらいという形。このシリーズがどのぐらい入って、どういう効果を得ているかというところまで、ちょっと今回は調べられなかったんですけども。

それから、もう一つのチケットに関するイニシアティブは、これは私も利用したことがあります。 「ワイルドカード」というシステムが導入されています。これはイギリスでは、ほかの団体もやっていて、流行っているんですけども、シーズンのチケット販売開始時に10ポンド（1,500円ぐらい）の「ワイルドカード」チケットを買くと、最終的に当日席が割り当てられるかという形です。要するに売れていなければいい席に座れるし、すごく売れていけば一番安い15ポンドぐらいの席になるという、席にこだわりがなく安く行きたいという人には、結構お得なシステムです。これはフィルハーモニアもまねして、同じような「リングサイドシート」というのをやっていますし、それから、イングリッシュ・ナショナル・オペラも同じようなスキームをやっています。

学生に関しては、以前はLSOなんかも独自にやっていたんですけども、今は、ロンドンのクラシックの団体が全部一緒になって一つのウェブサイトをつくって、当日残っているコンサートのチケットを学生は5ポンドで買える。もうアプリもあって、アプリをダウンロードしてれば、もう、ピピピッと買っていいというような、そういうものもあります。

これはLSOじゃないんですけども、学生向けのコンサートを以前から力を入れてきたのは、エイジ・オブ・エンライトンメントというオーケストラで、彼らは「ナイトシフト」という、これはちょっと言葉遊びで、「夜勤」という言葉にかけたシリーズを長年やっています。彼らの通常のコンサートは、7時から始まるんですが、10時からもう一回同じコンサートを、それもちょっと短くして1時間のコンサートで、主に学生たちを対象にして、それもやっぱり4ポンドとか5ポンドとかで、しかも、ビールもついたりとかします。でも、オケ側としては、そこで2回コンサートをやって、しかも、2回目は若者中心にできるということで、これはすごくとても活気があって人気のシリーズです。

あと、そうですね、ちょっと思ったのは、一応、このラトルになってから、ちょっとLSOのロゴというか、デザインを新しい感じにして、今はもうみんなこの動いている感じ、何か多分、指揮をしているような感じの……。いわゆるブランディングも新しく統一しています。

前回もちょっとお話ししたかもしれないですけども、私が見ている感じでは、今実は、少なくとも東京に関しては、日本のオーケストラのコンサートのほうがロンドンよりずっと人が入っているんじゃないかというふうに思っています。前にも言ったかもしれませんが、ロンドンは今では定期演奏会という概念がないんですね。それは要するに、定期演

奏会としてまとめて10回シリーズで年間で買うというのはもうないですね。もちろん幾つ買ったら安くなるとか、そういう割引システムはあるんですけども、やっぱりロンドンの客は、いろんなエンターテイメントがあるので、この日は劇場に行きたいとか、自分の好きなものを選んでいきたいというふうになったのが、もう既に20年ぐらい前からなんです。

だから、ある意味、ロンドンのオーケストラのほうがか客離れという問題に早くから直面してきたと思います。やっぱり定期会員が多ければ、ある程度の聴衆をやっぱり見込めるわけですから、それを1個1個のコンサートを、本当に1個1個売っていかなくちゃいけないというのが、今のロンドンのオーケストラの抱えている事情であって、バービカン・ホールは1,900席ぐらいだと思うんですけども、フィルハーモニアとロンドン・フィルがベースにしているロイヤル・フェスティバル・ホールは、実は2,500席ありまして、これは本当にもう、シーズン1、2回売り切れれば良いぐらいじゃないかというぐらいで。不思議と安い席のほう売れないという、これも、またロンドンの事情かもしれないんですけど。

あとは、ホールの音がバービカンもサウスバンクもどちらも余りよくないので、今は、やっぱり皆さん、耳が肥えてしまったので、音楽が好きな人は、いろんなヨーロッパのコンサートホールとか、イギリスもロンドン以外のホールもありますし、音の悪いコンサートホールでは聴きたくないというのものもあるのかもしれない。それで新コンサートホール建設の計画が話題になっているわけです。まだ実現には長いと思うんですけども、ラトルがやっぱりロンドンに新しく音響のいいコンサートホールをつくりたいという話で、これは主として、LSOとシティ・オブ・ロンドンとあって、LSOがあるいわゆるロンドンの商業地区ですけども、そこが一体となって話を進めています。ただ国の補助はほとんど望めない、今はブレッグジットのこともありますし、そのブレッグジット前に出てきた話だったりとかしたので……。

【吉本副座長】　でも、この間ラトルは建築家も連れてきてきましたよね。

【後藤委員】　新コンサートホールの予定地は一応決まっているんですけど、その場所には、まだMuseum of Londonというミュージアムが普通に営業中で、そのミュージアムが移転するので移転した跡地に新しく建てるという話なので、まあ、ちょっとまだ少なくとも5、6年かかるんじゃないかなと思うんですけども。でも、ラトルは自分のいる間に、これを進めたいと思っていると思います。

最後に、あと、LSOはバービカン、コンサートホール以外でのコンサートというのにもものすごく力を入れています。これはヴァレリー・ゲルギエフのころから始めたんですけども、毎年1回、5月ぐらいに、ロンドンのど真ん中のナショナル・ギャラリーの目の前のトラファルガー・スクエアで、大きな野外コンサートをしています。これはBMWの協賛を得まして「BMWオープンエアクラシックス」といって、ことしはYouTubeでもストリーミングもありましたけれども、入場無料で、本当毎年入り切らないぐらいで、意外にも一度も雨に降られずにやっています。これは結構、一般の人たちに、ふだんオーケストラを知らない人に認知してもらおうという意図があると思います。それから、さっきの東京芸術劇場でのサラダ音楽祭もそうかもしれないですけど、やっぱり通りがかりの人に認知してもらおうということで、すごくいいと思います。

もう一つ、昨シーズン象徴的だったのが、ラトルがテート・モダンでやった「グルッペン」。シュトックハウゼンの「グルッペン」をテート・モダンというミュージアムの入り口の、とても特殊な空間の中でやるという企画です。これもやっぱりテートとのコラボレーションというような面もあると思うんですけども。ある意味、危機感の中からいろんな方向にLSOはリーチしようとしているのかなと思います。アウトリーチも、もうあえてアウトリーチと言わなくても、もう本当にLSOの活動の一部になっていて、それぞれの部門がとても相互に絡み合っていて展開しているという印象を受けます。

要するにエデュケーションはエデュケーションだけ、コンサートはコンサートだけという形じゃなくて、もう活動全部がつながっているなというのが今のLSOだと思います。もちろんスタッフ、随分たくさんいると思いますし、マーケティングとかお金集めの部門も、とても充実しているからできることでもあるとは思いますが。以上、海外の事情の紹介ということで、ありがとうございました。

【吉本副座長】 どうもありがとうございました。

きょうは石田さんも後藤さんも国際的な事情について、いろいろご紹介いただいて、とても参考になる情報がいろいろあったと思います。

それでは、ここから意見交換に入りたいと思います。

石田さん、後藤さんの発表について、ご質問でも結構ですし、そこから広げて、都響の今後のことについて、ご意見をいただいても結構ですので、皆さん、どうぞよろしく願います。

【池田委員】 オペラの東京フィルハーモニー交響楽団。前回の私の発表で、主催公演と

してチョン・ミョンフン指揮で「蝶々夫人」をやるとき、新国立劇場のピットに入るとき、二期会や藤原歌劇団のときとで、にわかには同一名称の団体と思えないぐらい演奏水準のばらつきがあります。オペラを専門にやるということが必ずしも水準の向上につながるのか、つながらないのかという議論はあるでしょう。シンフォニーオーケストラである東京都交響楽団がよそのピットに入るんじゃなくて、たとえ、それが演奏会形式だったり、サラダの応用編でプロジェクションマッピングとかAIとか、ちょっと新しい技術を使っておもしろいのをやるにしても、気合いを入れてやるのとやらないでは、仕事の意義が全然違うように思うんですよ。ただ、漫然とオペラをやればいいというものではないわけです。

そういう中で、例えば都響がたまにピットに入る。やっぱり昔は割と特別な機会に良い指揮者と入ることが多かったのです。例えば1970年代後半の東京文化会館でやった二期会、鈴木敬介演出のモーツァルト「フィガロの結婚」でも、ズデニェク・コシュラーさんがピットに入って、しかも日本語上演で、多少、片仮名はお書きになったけど、ほとんどわからない言葉でびたっと指揮をしたり、その前後にはNHKのイタリア歌劇団でも大変有名だったアルベルト・エレデが同じく二期会の公演でヴェルディの「イル・トロヴァトーレ」を指揮して、発足からまだ10年ぐらいの都響から火の出るようなヴェルディの音を聴かせたとかね。こういう特別な機会が与えられたときに大きく伸びるものです。ただ、オペラの仕事を増やしていいというものではないのでしょうね。

ただ、やはりキュッヒルさんもヒンクさんも、元ウィーン・フィルのコンサートマスターが最近やたら日本で仕事をされているんですけど、二人ともウィーン・フィルの時代より表情が明るくなって、ジョークばかり言うようになって。ウィーンではやっぱり年に何公演もオペラやバレエのピットに入って、ローテーションがすごい厳しいんですね。ベルリン・フィルの場合はそれが無いから、一人ひとりがソリストとしての活動を物すごくやっているんですけども、やっぱりその違いがアンサンブルの質の違いにも出ています。オペラと無縁ということは、余りよくないけれども、こういう本当にシンフォニーオーケストラ、東京都民のオーケストラだし、いろんな活動をやっている中で、本当に意義あるところだけドカンといいものを作ってほしいなという思います。ただ数を増やすということではないかと。

【吉本副座長】 今、都響とオペラってどんな感じなんですか。

【国塩芸術主幹】 二期会さんからいただいているお仕事が基本的に年1回、大体あるんですね。オペラの仕事というのは、リハーサルも含めて非常に多くの、長い日数をとられ

て。

実は都響というのはいろいろあるんで、その間にいろんな仕事を突っ込んでいくということが非常に難しいルールになっておりますので、年に何本もオペラをこなすということは現実的に不可能なんです。それをやっていると、定期演奏会と肝心の音楽教室ができなくなってしまうということがあるので、それを両立するために、基本的には年に1回やりますね。

ですから、例えば今年度は、2月に新国立劇場で「紫苑物語」の世界初演をやらなきゃいけないんですけども、それがあつために二期会さんのお仕事は受けておりません。受けられないという状況なので。

オペラの経験は、我々も本当に重要なので求めておるんですけども、自分たちで主催するということも簡単ではないので、多分何かそういった本当にピットに入って、オペラとして体験するということはありがたいので受けたいところです。大体今年、年に1回ペース、どこかしら、二期会か、今後は大野和士音楽監督がいる関係で新国立劇場の仕事もあるかもしれませんし。

2年後、もう発表になっています、2020年「マイスタージンガー」の予定も入っていますので、そういったものは、少なくとも年に1回は手を挙げていつているということです。

【池田委員】 「紫苑物語」にしても何にしても、割と難しい題材を日本のオペラは選びがちなので、なかなか子供まで興味がおりていかない。日本オペラ協会の「静と義経」の記者会見でも、「皆さん、お話はご存じのとおりです」と出席者全員が言うから、今の子供は「静と義経」を知りません。「ロミオとジュリエット」のほうがまだ有名ですよ。「皆さん、ご存じのとおり」というところで、もうPRは敗北したと思うんです。

ある種のインテリ層だけで共有している情報を、その集団の中だけで拡大再生産しても、お客様は増えないという冷厳な現実がそこには横たわっているんで、もう一工夫欲しいなといつも思っています。

【石田委員】 もちろん回数ではないというところはあると思います。質が重要ですし、どういう作品、どういう機会、どういう指揮者、どういう歌手なのかが大事だということは言うまでもないんですけども、レパートリーを拡大して、声のものを扱うということがオーケストラの音や表現の幅を広げると私は思っているんです。

器楽の奏者にとって、歌ものに取り組むことがどれだけ表現力を豊かにするか。このこ

とは、私は声を大にして言いたいなと思います。

【池田委員】 ライナー・キュッヒルさんがおもしろいことを言っていましたよ。ピットで弾いていて、その日の指揮者がだめだった場合、指揮者をアウスシャルテン〜ドイツ語で電源のスイッチをオフにするという言葉なんですけど〜その瞬間、私たちはアウスシャルテンして、歌手たちとの直接コミュニケーションに切り替える。そういうことができるオケが本当のオペラのオケなのです。

【石田委員】 そこまでいくとすごいですよね。

メトロポリタン歌劇場管弦楽団の奏者達などの言うことを聞いていますと、彼らはものすごく歌手をリスペクトしているんです。その気持ちというのが生まれるのは、豊かな回数があるかないかということの差かなと思います。都響の皆さんに忙しいスケジュールの中でやってくださいとは言っているわけではなくて、オペラの世界に少しでも目を向けてくださると、個人的にうれしいなという思いでのお話です。回数の多寡ということではなく。

【吉本副座長】 湯浅さん、LSOのことをきょうご紹介いただきましたけど、LSOは他にも高齢者向けのプログラムなどもやっているんですよね。この間もその関係で来日しましたよね。

【湯浅委員】 LSOのマネージング・ディレクターのキャスリン・マクドウェルは、英国で80年代にオーケストラや音楽団体が教育的なプログラム、コンサート以外に地域にかかわるのを推進した中心人物の一人です。キャサリンとは何度もお話をしたことがあるのですが、教育に対して大きな情熱を持っている方です。今回、ロゴやブランディングを変更しましたが、サイモン・ラトルが就任して新たな可能性が広がり、地元の東ロンドンに根差した活動をしつつ、グローバルに活動し、さらに新たなテクノロジーの可能性を模索したり、オーケストラの可能性を最大限に広げるために猟色な取り組みをしていると思います。自分たちでレーベルを作ったりもしていますし。

【後藤委員】 レーベルは本当に一番早かったですよね、オンレーベルをつくったのはね、「LSO LIVE」を。

【湯浅委員】 そうですね、レコードレーベルによるCDの発売の機会が減ったので、それであれば自分たちでレーベルを作って世界の観客に届けようということだったようです。日本のファンのダウンロードがとて多いと話をしていました。ビジネスの推進と社会へのコミットメントと芸術性というのがすごくバランスがとれていて、とても戦略的に経営

をしているという印象を受けます。

【後藤委員】 実際によく来ていますよね。ちょっと時間があれだったんで紹介できなかつたんですけど、「L S O S i n g」というのがあって、それは定期演奏会で取り上げる曲を日曜日の午前中、午後かな、一般のきょう1日で歌ってみましょう的なプロジェクトを、サイモン・ハルジーさんを連れてきてやっているんですけども、本当に通して練習して、午後に1回通す。それにはL S Oのコーラスの合唱団の人たちが中に入っているんで、ちゃんと成り立つようになっているんですけど、そういうときにも、やっぱり彼女はちゃんと、マクドウェルさんはちゃんと来ていて様子を見ているし、例えばセントルークスのランチタイムコンサートなんかにも来ているし、本当にいろんなところで活動を全部見ている。

あと、もう一つ、さっき言いそびれたのは、セントルークス自体の経営は、実は貸し館にしてパーティーとか何かのランチとかクリスマスパーティーとか、そういう貸し館としての収入でやっているんですよ。だから、そういうところもうまいなど。

【湯浅委員】 最近、コミュニティのプログラムではコーラス（歌）も取り入れているという話を聞きました。彼らが拠点としている東ロンドンは、移民の方や低所得の方も多くいる地域です。そういった地域では、必ずしもすべての家庭が楽器を買えるわけではないようです。子供だけに限らず、高齢者も含めあらゆる人が音楽に参加できるように、コーラスも取り入れているようです。

現在、社会が高齢化する中、L S Oとしても英国のほかのオーケストラと連携して高齢者を対象にした音楽プログラムを充実させようと検討しているという話も聞きました。社会が変化する中、時代に即したオーケストラであるため、いろいろな努力をしているようです。

【池田委員】 一度、NHK交響楽団がロンドン交響楽団と提携、アンドレ・プレヴィンが頻繁にN響に来ていたときに、提携を調印して記者会見までやって、それで、結局そこに盛られたメニューというのはほとんど実現しないで終わりました。例えば定期演奏会というのは、19世紀の富裕市民層ブルジョワジーがつくった予約演奏会制度から来ている。年間の権利を買って、毎月1回何かをその団体のプロデューサーが提供するものを聴く。そこに社会的装置として、オーケストラが組み合わさっていったわけですけども、それだからN響の定期にロンドン響が出演したり、ロンドン響の定期にN響が出演するというような話も交渉段階ではなされていた。でも、やっぱりN響の会員たちは「私たちはN響

を聴きたいんだ」といって、全然かみ合わないままでした。ちょっと時期尚早だったのかなと思うんですけども、そういう提携が試みられた時代もかつてあったんですね。インターネットがもっと普及する以前の、LSOレーベルを立ち上げたころの話。

今申し上げたように、オーケストラが一つの文化的国家の社会の装置、「装置」と僕はよく言うんですけど、装置である以上、それがスタンドアローンで屹立している存在じゃなくて、さっきおっしゃったように企業だとか、そういった福祉団体、いろんなところにアウトレットを持って、音楽のことに何かちょっと相談事があるんだけど、LSOに行ってみようみたいだね。常によろず相談駆け込み所みたいな接点をLSOはうまくつくっているなという印象は、この間も持ちました。

【湯浅委員】 以前、近藤理事長にキャサリンをご紹介した際に、彼女が話したことが心に残っています。オーケストラと社会との関係についての話題になった際、彼女は「オーケストラは拠点としている地域にとって重要な資産である。地域に住む人々のために貢献することは当然だ」と話していました。だからこそ、LSOは国際的に活動すると同時に、拠点である東ロンドンの人々を対象に大規模な教育・コミュニティプログラムを展開しているそうです。

【後藤委員】 ただ、やっぱりアセットだって思ってくれる人たちが減っていつている、イギリスなんかでも、やっぱりいまだに一部の富裕層のものって思われていて。やっぱりアクティブにいろんな活動で働きかけていかないと、それがアセットであると思ってくれなくなると、当然、補助金なんかも減っていくという、それでやっぱりすごくアクティブに働きかけて、そこが私はやっぱり危機感をみんな持っていると思うんですよね、今、イギリスのクラシックの関係者は……。

【池田委員】 楽員が、でも、ちゃんと顔を見せているじゃないですか。

【後藤委員】 もちろん、もちろんです。そうです。

【池田委員】 日本の場合、非常にオーケストラの楽員というのに対して社会の見る目が複雑で、高尚なクラシック音楽をやっているんだから、さぞ金持ちだろうとまず思う。

次に、それぞれのオーケストラの給与水準なんかをたまに知ると、恵まれていると言われている都響でも、一般楽員は都立高校の先生並みということでよく言われる。さらにほかのオケはもっと悪い。ところが練習場に行くと、駐車場には外国製の自動車がずらっと並んでいて、多分お一人お一人がおうちで教えたり、スタジオの仕事をしたりして、それなりに年収はあるのかもしれないとかね。

結局、日本のオーケストラの楽員さんの場合、割と最近は変わってきたけど、かなり長期間自分の顔の実態を社会にさらすことに恐怖を覚えていたような期間があって、これが、ますます不思議なところで日本のオーケストラが存在する一因になったんだと思う。

昔は楽屋に行くと、さっと楽員の人はいなくなるんですよ、一般の人が入ってくると。今はそういうことは、なかなか、「よう来た、よう来た」となっているけど、終演の拍手をして、上野駅のホームに立つと、さっき弾いていた人とほとんど同じホームの中で人とかかわりを避けて去っていく人たちという印象が、子供のころには随分ありまして、それが、結局、長期的にお客を減らす原因にもなったんじゃないかなと思います。

【吉本副座長】 僕も何年か前にセントルークスへ行って、湯浅さんに手配していただいて、いろいろ拝見したんですが、本当にいっぱいやっていますよね。何かガムランのをやってみたりとか、それからコーラスも幾つも種類があるし、セントルークスって、たしかあるプログラムはそれこそ高齢者で車椅子の人とかが大勢来るようなものもある。LSOって、楽団員との契約はどうなっているんですか。あんなにたくさんのをやりながら、演奏会もやるということになっていて、みんな個人個人で契約になっているんですか。

【後藤委員】 LSOは本当に出たコンサートの回数、それこそ年間給料ではないんですよ、たしか。なので、1回自分が休んだら、その部分はもらえないという、多分オランダのオケとかだったら考えられない。

【湯浅委員】 皆さんがシェアを持っているというか、楽団員の自治で運営されています。

【吉本副座長】 自治なんですね。ただ、ラーニング部門のディレクターのルーシーさんに聞いたら、本番に出るのももちろん意義があるんだけど、教育プログラムをやると、それもプラスアルファと再評価されるというような、仕組みも考えているということでした。

【後藤委員】 そうだと思います。

【吉本副座長】 やっぱり楽団員の方一人ひとりがそういうことにすごく熱心にやろうというか、やりたいというのがないと、なかなかできにくいですよ。

【湯浅委員】 LSOのミッションを見てみると、「to make the finest music available to the great number of people. 素晴らしい音楽を、あらゆる人に届ける」とあります。LSOのすべての活動の根底に、このミッションがあるというのが良くわかります。

【吉本副座長】 今、湯浅さんがLSOのミッションを照会してくれましたけど、都響の

それに相当するものは何なんですかね。都響がこういうことを目指しますみたいな。

【池田委員】 これですか。「この楽団を国際水準まで育て上げ、都民の生活の向上と青少年の情操教育に役立てることによって、国際的文化都市東京の建設の一環とする」。

この概要というところですね。設立趣旨書より。

【吉本副座長】 抜粋の部分ですね。なるほど。

これ、でも、設立のときから変わっていないんでしょうね。

【池田委員】 でも「情操」という言葉は「教養」と並んで死語ですよ。言っても何のことかわからない人が多い。

【近藤理事長】 LSOはオーケストラとして、考え得ることをほとんど全部やっているような気がしますけども、本来のオーケストラの演奏と、それ以外のいろんなアウトリーチなど大体どれぐらいの比率、つまり時間、あるいは経費をどれぐらい割いているのか。それは5%なのか1割までいっているのか、もっといっているのか。それがどう変遷しているのか。その一種のポートフォリオを、何が最適と見て、中長期的に。教育の効果とかレベルを保つとか、いろんなコンセプトがあり得る要素の中で、誰がどういう設定をして今のポートフォリオになっていくのか、ということ、ぜひ今後調査してほしい。

もちろんそれはオーケストラによって少しずつ違うと思う。だから都響は都響として、どういうポートフォリオがベストなのか。今はほとんど定期演奏会とか、それと、もちろんカルテットとかで出るのもあって、相当やってはいますけれども。今後10年、20年を見据えて、どういう組み合わせをするのがいいのか。それは収入の面もあるし、そこら辺をちゃんとじっくり協議しないとお題目を幾ら書いてもしょうがないわけで、実際にどういう時間配分をするのか、人を張りつけるのかということ、少し踏み込んでやったほうがいいかなと、ちょっと今、伺っていて思いました。

【後藤委員】 職員の人数が全然違いますよね、LSOと都響では、多分ね。

【国塩芸術主幹】 それと、ちょっと補足ですけど、この間、たまたま大野さんとお話したんですけど、今、ロンドンのオーケストラは、とにかく定期演奏会のリハーサル日数が、もう1日か2日。もう、フィルハーモニア管弦楽団に至ってはどんな難しい曲でも大体1日、2日。そうやって、いろんな事業をやる時間を確保しているためなのか、そうじゃないのか、そこまではわからないんですけど、そう聞いたことがあります。

【後藤委員】 でも、LSOは前から2日練習で、当日、午前中ゲネプロで本番というのは、それは20年間変わっていないと思います。それは多分、イギリスのオケは昔からリ

ハーサルが長いことでは、要するに、もともとが給料制じゃなかったから、やっぱりリハーサルにもお金を出していかなきゃいけないという事情もあった。しかも初見が早いので、イギリス人。でも多分、ラトルとかエサ＝ペッカ・サロネンのときは、やっぱりリハーサルがちゃんとあって、そうじゃないものは、それこそ地方公演が先にあって、その後でロンドンがあると、地方でリハーサルをやって、本番をやって、それが練習となってロンドンへ持ってくるみたいな、そういうことはフィルハーモニア管弦楽団なんかは確かにありますね。

【池田委員】 フィルハーモニア管弦楽団はちょっとヘタレで、ロリン・マゼールがよくドサ周りツアーって、とんでもないところにお金持ちから頼まれて行くときに、一人か二人しか正団員がいないフィルハーモニアをつかって、ロリン・マゼールのドサ周りって英語で何とかという言葉があったらしいけど、それでもフィルハーモニア管弦楽団という名前です。だから、すごいたくましい。

ただ、イギリスには、皆さん、スタッフ、ボランティアがいっぱいおられるんでしょうねと言っていましたけど、高貴なボランティアの方がいっぱいいらっしゃるわけです。私は、証券部の機関投資家担当の記者だったときに、サー・クリストファー・パーヴィスという方が英国の証券会社の日本法人トップだった時代に、50歳代初めで一生食べていけるだけの資産を形成して、勇退、この人は、今のBBC会長で前のロイヤルオペラ総裁だったトニー・ホールとオックスフォード大学で同級生なんですけど、とにかくロンドンに帰って、英国ヘンデル協会の無給役員になり、ヘンデルが最後に暮らしていたヘンデルハウス、一部商店になって、アパートになっていたところを元の形に戻し、ヘンデル博物館として再建するまで全部無給で奉仕したんですよ。

私が後にロンドンへ出張したときに会って、ハウス内部を全部案内してもらったんですけど、そういう形で働ける人がいっぱい社会にはいるということで、日本にはそれは全くいないに等しいので、ちょっとそこの違いは大きいんじゃないでしょうか。

【吉本副座長】 きょうは石田さんと後藤さんから情報提供をいただいて、石田さんからはオペラの話、後藤さんからはLSOを中心にいろんな交響楽団の話などもしていただいて、今、いろいろ議論をしている最中です。

続いて、どうしましょう。

【中根委員】 私はロンドンに余り詳しくないんですけど、石田委員の韓国のお話に大変興味を持ちました。といいますのも、私、1998年から2000年まで韓国の大使館に

勤務しております、ちょうど文化を担当していたんですけれども、そのころ、韓国は音楽もそうですけれども、映画にすごく力を入れていて、特に国立芸術大学を通じて、国が全部すごい力を入れてやっている。そこで映画なんかは日本と比べると、もう国がすごい後押しをして、10年ぐらいで世界に。それまで韓国映画ってほとんど知られていなかったと思うんですけれども、ちょうど何人かスター監督が出てきて、あっという間に世界中に韓国映画の名前がとどろくようになりました。

音楽についても、例えば石田委員のほうからお話があったオペラについても、もちろん韓国は昔からアジアのイタリア人と呼ばれていましたので、オペラについては特に音楽の人はすごい人がちょこちょこはいたんですけれども、オペラ全体を構成してつくっていくということについて、まだまだでした。さっきちらっと私の友人で、韓国の有名な作曲家でもあるイ・ゴンミョンさんの顔が見られてすごくうれしかったんですけれど、イ・ゴンミョンさんも、当時は私のところに来て、サバティカルのときに、ぜひ日本でオペラを勉強したいので、日本の奨学金に応募したいと言ってこられました。

【石田委員】 いらっしゃいました、日本に。

【中根委員】 彼は日本留学後、春とかいろいろなオペラを作られています、日本から非常にたくさん学ぶことがあったと喜んでおられました、韓国も当時はそういう時代だったんです。

ところが、やっぱり国がすごく力を入れて、国立芸大を中心にどんどんと金も人も投じて、これも国が投資したということもあるし、それから、さっきサムソンの例が出ていたけれども、韓国は非常に少数の財閥がすごくお金を持っていて、美術館もそうですけれども、音楽のほうにもすごく力を入れている。さっきのサムソン以外にも、芸術の殿堂は錦湖グループというのがバックアップしていますし、中国も恐らく今、IT関連企業で、そういうスポンサーが次々として出てきてオペラハウスのスポンサーになっているのかという気がします。残念ながら日本を見ると、国がまだそこまで、支援をしてきていないという部分があるのと、もちろん財界でもいろんな方が音楽関係にもスポンサーになってはいただいていますけれども、やっぱり韓国のほうから見るとまだまだという気がいたします。

それから、今日は海外事情がテーマということなので、是非お話ししておきたいのですが、実は私は先週、久しぶりにドイツのベルリンに出張する機会があって、会議が終わった後に、ベルリン・フィルに行ってきました。そこで何人かドイツ人の知人も含めて会ったんですけれども、「この間、都響が来てくれて、あれ以来全然来ないね」と言って、「待

っている」ということを言われました。私がちょうど大使をやったときに、近藤理事長のご示唆もあって、たくさん招待券をいただいて、ドイツ外務省の関係者とかいろんな人をお招きして喜んでいただきました。もう、あれが、2010年。

【近藤理事長】 3年前です。

【中根委員】 3年前ですか、2015年だったんですけども、やっぱり少なくとも隔年ぐらいに来ていただけるといいかなという気がします。

それで、ちょっとちらっと思ったんですけども、さっき近藤理事長から、来年が日本オーストリア友好150周年ということで、2国間関係において、この文化、特にヨーロッパは文化が柱になって、オーストリアとかドイツというのは周年行事をやっていくときに、どうしてもクラシック音楽というのを柱に据えたいと思っているんですけども、なかなか日本から来ていただくというのは通常は難しい。周年行事ということであれば、国もある程度は予算をつけてくれるのでこれを活用しない手はないと思います。それで来年は、実は日本オーストリア友好の150周年に加えて東京ベルリンの姉妹都市、友好締結25周年記念なんです。ご存じのようにヨーロッパは10年とか20年よりも、クォーターの4分の1の周年事業というのをすごく重視しますし、今まさに外務省を中心に来年の東京ベルリン25周年の何か記念行事というのができないかというのを、一生懸命血眼になって探しているときなので、まさに都響というのは、東京都の交響楽団なんでもというところもあるので、海外での演奏会をぜひ実現させていただきたい。周年行事をうまくそういう節目を利用していただいて、せっかく3年前に都響のことを知る、非常に水準が高いとって、大変評価してくれているので、そういうメモリーをきちんと受け継いでいくためにも、やっていただけるといいなということを思っています。

それから、さらに言えば2021年、今度は日独の外交関係樹立160周年なんです。160周年というと、ちょっと半端かなと思うんですけど、実はことし日本とフランスが外交関係160周年でいろいろとメディアで報じられているようにすごく盛り上がって大きな日本の文化事業が数多く行われています。そういうような節目節目の周年事業に、ぜひ都響が参加をされるといいなというふうに期待しております。

【池田委員】 前回の日独修交150周年のときは華々しく大使館で記者会見をやって、私も行ったんですけど、直後に東日本大震災が起きて。しかも、日本もドイツもあんまりそのとき経済状態がよくなかったから、ほかの人、例えばジャパン・アーツとか他社がやるものにワッペンをつけるというので、自主事業がほとんどない情けないメニューだと記

事を書いた記憶があるんですよ。だから、その捲土重来を期して、次はやるんだと思いますし、来年は日本とフィンランドの国交樹立100年と日本フィルの創立者でお母さんがフィンランド人だった渡邊暁雄さんの生誕100年が重なるので、日本フィルとしては6回目のヨーロッパ公演なんですけど、初めてフィンランドに。現在の若いフィンランド人の首席指揮者と行くということで、そういう話題づくりをしているオーケストラもあります。

【湯浅委員】　いま、今周年事業のお話になったので、英国についても一言お話しさせて下さい。

今年は、日英交流の160周年の記念の都市なのですが、2019年秋から2020年の秋にかけて日英両政府が共同で交流事業として、日英文化季間を行います。昨年、メイ首相が来日した際、安倍首相との首脳会談で発表されました。

【池田委員】　でも、問題は、結局日本でベルリン・フィルとかウィーン・フィルを呼ぶというのは日本側のアカウントというか、なんですけど、やっぱり日本のオーケストラがヨーロッパに行くというと腕試し、肝試し系で、こっちがかなりの費用を負担しなきゃいけない。だから向こうが完全に主催事業として、それこそ、その年の予約演奏会のシリーズに喜んで入れてくれるような状況には、残念ながらまだなっていないので、「来てくれ」という人は、非常に単純に言うんですけど、いざ行こうと決めた後の血みどろの日々というのは、また、もうちょっと一段深くオーケストラ側の気持ちに立ってみてもいいかなとも思います。

【大野音楽監督】　その件に関しましては、ご指摘のとおりであります。そして、私たちが2015年以来、海外での演奏というのを目指しておりまして、さらに、海外からのいわゆるフェスティバルの代表者の方々に、私たちの実力を見ていただくという機会をつくっております。

【吉本副座長】　住吉さん、いかがですか。今の流れを見ていて。

【住吉委員】　そうですね。私がそんなに出せることは余りないかなと思って伺っていましたが、一つ感じたのはLSOってすごいなど。英語の言葉の特性もあるかもしれないんですけど、やっぱりネーミングがすごく上手というか、ラッシュアワーコンサートとか、「LSO Sing」とか、すごくカッコいいんだけど、何をしているのかが誰も説明しなくてもわかるプロジェクト名とか、コンサートタイトルというのは、英語って、やっぱりすごくその点キャッチーで上手なんですよ。

それがちょっと何か日本って、それはでも言葉の特性もあるから難しいかもしれないんですけど、やっぱり、今回のサラダ音楽祭のちょっとPRとかもラジオとかでご協力したんですけど、サラダ音楽祭ってまず何というの説明とかが、「Sing and Listen and Dance」なんだけど、実はそこにオーケストラとかプレイは入っていないから、何かそれが何でオケがメインとなっているんだろうとか、ゼロの興味の人に伝えるときに、ちょっとその伝え方として、ちょっと苦労した面があったり、あと、タイトルを聞いただけでは何かがわからないみたいなことにおいて、何かできないのかなということ、今、タイトルというか、その辺が若い人とか、何かおもしろいこととかキャッチーなことを求めている人にアピールする言葉力がさすがだなというか、そこは何か日本語も見習えないのかなということのを思いました。

【大野音楽監督】 それはありますよね。ただ、ラッシュアワーのコンサートだと、例えばラッシュアワーというのは、これまた日本で、片仮名にすると、ラッシュアワーコンサートというのはダサいんですよ。サラダというのは、かなりいい線を行っている。それで、Sing・Listen・Danceといったときに、「ああ、そうか」と思いますよね。それで、サラダのコンサートというのは、結果として大成功でありまして、とにかくここ日本で、例えば少子化という言葉が存在していたのかどうかというのを疑うような人たちが、池袋の駅から次から次からいらっしゃるわけですよ。それは私たちの予想をはるかに超えていた体験でありまして、それでワークショップにも長蛇の列です。それで、楽器体験なんかのコーナーも、本当に入れない子たちがずらっと並んでいて、それは、その「サラダ、何だろう」と思ってもらえたい例じゃないかなと、私は逆に今は思っております、ですから、そういう意味でのネーミングというのもこれからどんどん考えていきたいですね。

【池田委員】 何だろうと思わせる。ラッシュアワーコンサート自体は、別にLSOのつくった言葉じゃなくて、クルト・マズア時代のニューヨーク・フィルもその言葉でやっていたし、割とこの業界では定番の言葉です。大野さんの新しい職場の新国立劇場で、当日、一番、とにかくさっきの何とかシートじゃないけど、Z席という。結局S、A、Bとあって、Zはどんじりじゃないですか。だから、当日行かないとわからないけど、出るかわからないけどとあって、イチかバチかでZ席というのは、新国立劇場ができたときからあった。これを目当てで行く人っているし、ネーミングとして、すごい秀逸だったと思います。どんじりのZって。とにかく、要するにイチかバチか行ってみたら割といい席を

とれたよみみたいな、僕も何度か買ったことが芝居のほうであるんですけど、なかなか人気のない演目だといっぱいZ席があつてよかったです。だから、あのネーミングはすばらしいなと思います。

【住吉委員】 質問があつて、石田さんのおっしゃっていた収入源の確保の話の、その他の収入というのは、あえておっしゃらなかったんですけど、皆さん、その他の収入ですごいところってどんなふうか。

【後藤委員】 遺産とかですか。

【石田委員】 いいえ、いろいろな自主財源の確保を行っていますね。

【後藤委員】 個人のお金、個人の寄付。

【石田委員】 それはファンドレイジングの中に入っているのが違います。さきほどは、ロイヤル・オペラ・ハウスの例でしたから、事業収入としては、グッズの販売、ケータリング、DVD、CD、それから放送権料なんかもあるんですけども、意外と重要なのが貸館収入なんです。劇場なのでね。

それから、ロイヤル・オペラ・ハウスには、少し離れたところにサーロックという倉庫があるじゃないですか。そこでも教育プログラムをやっています。そのための補助金ももらっています。自分たちの資源を全て活かしながら、どうやって資金を投入するのかという知恵を出してやっている。

事業収入は、彼らにとって、重要なポイントになっています。

【池田委員】 先週、ある国の大使館に行ったんですけど、今はパーティー会場として、結構な国の大使館が堂々と貸しているんですよ。要するに、大使館ももうちょっと自分で稼げて本国からの指示で、シャンパン、レストランだと幾らだけ、うちの大使館だと幾らですとか、ちゃんとみんなリストをつくっていて、意外に東京にある在外公館はそれで小銭を稼いでいます。今や世界がそういう時代です。そういうふうになっている中で、オーケストラは割と気位が高いから、そこまでしていないのかなとも思うし。

【吉本副座長】 すみません。まだいまだ議論が続いているんですけど、だんだん時間がなくなってきていて、これだけは今の議論の中で発言をしておきたいということがありましたら。

じゃあ、手短かにお願いします、湯浅さん。

【湯浅委員】 国際交流に関してですが、最近、来日公演を行う英国のオーケストラを見ていると、コンサートホールで演奏会をするだけではなく、教育プログラムやテクノロジー

一の活用など各オーケストラの活動全体を日本の紹介したい、また日本のオーケストラやホールなどの音楽関係者とネットワークを広げて、お互いに情報交換をしたいという希望をよく聞きます。公演を行うだけでなく、今後の協働につながるような関係を作りたいという希望があるようです。少子高齢化など日英共通の課題も多い中、都響ともいろいろな分野で交流の可能性があるのではと思います。

【吉本副座長】 僕も単純にロンドンと東京で提携できないのかな、とっていました。さっきN響とやったことがあると言いましたけど。ロンドンと東京って姉妹都市だったりしますよね、多分。

【大野音楽監督】 そうですね。ちょうどラトルがベルリンからLSOに帰ってきますので、それと、また個人的に私自身が知っているものですから、ラトルとも連携をとって、何かできないかと考えています。

【後藤委員】 サントリーの「H i b i K i」は、あれはBBCとジョイントで作曲委嘱をやりましたね。随分BBCの側でも、サントリーも大きく出ましたよね、オーケストラも。

【大野音楽監督】 そうですね。「B a c h t r a k」というネット批評があるんです。それに都響のサントリーホールでの演奏、サントリーホール委嘱作品ですけども、そのカーテンコールの都響の映像がかなり大きく出まして、それと同時にプロムスのBBCのも私が指揮をしたんですけど、その演奏会が二つ並んで、国際的なホームページに出ったので、大きな発信になりました。こういうこともやっていきたいというふうに思っています。

【吉本副座長】 ありがとうございます。後藤さんよろしくお願いします。

【後藤委員】 一つだけ。ちょっと韓国のオペラとか中国とか、オーケストラはどうなっているんですかという、ケース・バイ・ケースだと思うんですけども、それぞれちゃんと劇場付きのオーケストラがいるんですか。

【石田委員】 プロフェッショナルのオーケストラが外から入って演奏しています。その都市のオーケストラがピットに入る、日本と同じ形です。

【後藤委員】 稼働率とかも、オペラ劇場としても。

【石田委員】 稼働率ですか。例えば中国は、今、オペラのフルの上演が、聞くところによるとまだ200公演ぐらいあるかないかだそうです。

【後藤委員】 国全体ですか。

【石田委員】　　そうです。ただ、それもきちんとした統計があるわけではなくて、日本が1, 100回と言ったら「それはすごい」、一方中国はと言って返ってきた数字です。多分、今後、その数はふえると思います。

それと、もう一つ中国はオリジナルの創作のオペラというのを大事にしている、数多く作っているんです。彼らのオペラの認識は、西洋のオペラと自分たちの創作オペラが半分ずつ、例えばプッチーニ、ヴェルディ等の作品が半分というようなバランスになっているようです。

【池田委員】　　さっきの韓国で、スカラ座で昭和音大のスタッフ研修の写真をさっきお見せになったけど、韓国で何度かオペラを取材したことが私もあるんですけど、スタッフが育たない悩みって、何でも頂上を目指せという教育理念の国なので、みんなが演出家を目指して、演出助手になる人がいない。合唱団も、合唱団の定期演奏会は芸術活動の発表の場だから、オペラで服を着て、主役じゃない後ろで演技するのなんてばかばかしいという、そこが韓国のオペラ界が歴史的構造的に水準上昇を阻むメンタリティといえます。

【吉本副座長】　　すみません。議論はここで終わらせてください。時間になってしまったので、事務局から次回のご案内をいただきたいと思います。

【小川GM】　　最後に1枚A4の資料をつけております。

第4回、次回のテーマの設定についてですが、こちらにつきましては、前回の懇談会、この場でご説明して、ご了承をいただいている内容でございますけれども、第4回の懇談会は、1月21日、テーマは「オーケストラに求められる多様な活動と社会的役割」です。クラシック以外の音楽分野での活動など、これまでの既成概念にとらわれることのないオーケストラの活動と社会的役割について、ご議論をいただきたいと思います。プレゼンテーションにつきましては吉本副座長、澤委員、湯浅委員をお願いしているところでございますので、どうぞよろしくお願いいたします。

【吉本副座長】　　先ほど、大野音楽監督が来られましたが何かお話しいただけますか。

【大野音楽監督】　　今、オペラの話題がありましたけれども、これから私、新国立劇場のポジションの関係もありまして、都響が新国立劇場のピットに入る機会というのも自然と多くなってくると思うんです。そこで、私は都響ならではの曲目を彼らにピットに入ってやってもらいたいというふうに思っております。

ですから、都響の世界的にいろいろな形で評価されている、そういう利点も生かされるプログラムを持って入ってもらいたいというふうに思っております。

【近藤理事長】 ありがとうございました。

【吉本副座長】 今日はお忙しいところ、どうもありがとうございました。まだありますか。

【赤羽事務局長】 ご紹介ですけれども、サラダ音楽祭がTOKYOMXテレビで放送されます。10月28日、日曜日の21時29分から22時までということで、「世界でいちばんやさしいオーケストラ」という副題がついております。サラダ音楽祭が半分と、あと被災地支援事業の石巻の情報を約30分流していただけることになっておりますので、皆様、よろしかったらチェックしてみてくださいと幸いです。

【吉本副座長】 ありがとうございます。

 本当に長時間ありがとうございました。